青年海外協力隊マレーシア会　20号

協力隊創立時のことを思うとき

高橋　成雄（元　広尾・駒ヶ根訓練所長）

筆者近影　奥様と 2021 年年末

この度、マレーシア会の会報に思い出に残るようなことを書き留めてほしいとのご依頼で、すでに 90 の坂を超して 2 年余になる小生は、「青年」という名の仕事に恵まれたことを、とても幸せだったと感謝してまいりました。特に青年海外協力隊創立に先輩の寒河江、末次両氏のもとで創立に名を連ねられたことは幸せでした。そこでこのお二人にかかわる思い出の２～３を書き留めてみたいと思います。

先に青年海外協力隊創立五十周年記念式典が横浜で開催され、隊員 OB・OG の皆さんも大勢参加、大盛況でした。感慨深く協力隊創立のころを思い返しました。すでに事業に参加した OB・OG 隊員は 5 万数千名、中には次世代から孫世代に引き継がれている隊員のお話はこの事業の持つ極めて重要な意義を表すものとして嬉しい限りです。

末次氏と平澤駐在員　K.L.にて

青年海外協力隊創立への動きの中で、特に創立の中心的役割を果たした、寒河江・末次両氏は青年海外協力隊を本来の事業目的が確実に担保される特殊法人を目指していた。具体的に提案されたのは、仮称「青年海外奉仕隊」。当時、末次氏がアフリカ各国に派遣されているピースコーを視察、日本健青会案として別に提案されたが、基本的に考えは同じであった。まず、寒河江氏は参加隊員の育成を目的に産業開発協会の事業に特別コースを設けている。この事業に参加した隊員に、元 OB 会会長の新保昭一君をはじめ、熊野秀一、吉川浩史，隋林吉衛、金山昌功君等が居られる。

昭和 40 年 4 月、外務省の委託事業として、当時の OTCA（1962 年に発足した海外技術協力事業団の略称）に委託され、OTCA 国内事業部長篠浦公夫氏が初代事務局長として就任。青年の指導育成の経験を持つ寒河江善秋氏を事務局運営顧問とされた。隊員の訓練指導等、特に初期における諸準備にあたられ、貢献された。訓練所の特別講義で“青年海外協力隊事業は誠に諸君が青春を賭

けるに値する意義ある事業である。私は男の子が 4 人いるが、うち 2 名は諸君の後に続くものとして必ず参加させる”と、隊員候補生を前に約束されている。その後、長男タンザニア、次男インド、三男ザンビアに派遣された。寒河江氏はその後、病を得て、他界、享年 57 才。若くして他界された。

確か、昭和 44 年 4 月、突然、寒河江氏から西村訓練所長がやめ山形に戻ったため、後任として 2〜3 年協力するよう連絡・要請された。創立に寒河江・末次両氏とともに役割を果たした一人として、日本青年団協議会の会長を退任、広尾の訓練所長として勤務することになりました。送り出した隊員の現地視察や帰国した隊員の皆さんのたくましい姿、しかも現地の人々に学ぶことが多かった等、現地体験から学んだこと、感謝の言葉を聞き、感動を覚えた。私の訓練生の皆さんとの約束は、現地から手紙をくれたら、必ず返事を書くということだったが、なんと約千通ほどあり、私の大事な宝物となっている。

空港からダッカへの渡し舟
末次氏が船頭の櫂を借りて

かつて、創立案をたてられた時、協力隊事業の目的をどう確保するかをめぐり、外務省筋とずいぶん協議が続けられたことを思い出す。青年海外協力隊実施に当たり、外務省が現地調査を行っているが、外務省側はボランティアに関する理解が乏しく、技術、経験も少ない、かつ外国語も貧しい若者のボランティア派遣は無理と考えていた。すでに実施中の青年技術者派遣（1963 年に OTCA が実施母体として開始)、専門家派遣のようなものを考えていた。これに対し民間側は、時の政治によって事業目的のボランティアを変質させることのない独立した組織による運営を考えていた。議論の末、青年海外協力隊は OTCA に委託の形で青年海外協力隊事務局として発足、協力隊員の派遣にあたることとなった。

その後、OTCA から JICA に変わり、協力隊事務局も組織が改変されていった。特に協力隊の現地業務が各国の JICA 事務所の所管となったとき、末次氏は当時、胃がんの手術を受けられたが、退院直後にもかかわらず、直接自分の目で、協力隊員の活動状況を確かめたいと、東南アジアさらにアフリカを希望しておられたが、病み上がりの氏の体調を考慮し、約三週間、東南アジアを視察された。協力隊事務局の要請で小生が氏のお供を務めた。大病を押してなお、協力隊のありようを思う氏のお心に打たれた。

青年海外協力隊創立に尽くされた寒河江・末次両先輩が五十周年式典に出席されていたら、どのような思いを語られるか是非、伺いたいものである。

協力隊豆知識
協力隊事業は外務省が 1965 年に OTCA（1962 年発足の海外技術協力事業団）に委託、OTCA の外局として日本青年海外協力隊事務局が組織され、スタートした。1974 年、海外技術協力事業団と海外移住事業団が合併、特殊法人国際協力事業団（JICA）が発足。協力隊は日本が取れて、青年海外協力隊となった。

【最近思うこと】

青年海外協力隊マレーシア会　会長　白山肇

私たちは今、二つの困難に直面している。１つは、２年半になるコロナウイルスとの付き合いである。100 年前に経験したスペイン風邪(1918 年 2 月〜1920 年 4 月)以来の猛威を全世界に示している。２つは、ロシア、プーチンのウクライナ侵略である。一人の独裁者の暴走を止めるには至っていない。短期的解

決が望まれるが、第二のベトナム戦争ではと危惧される。これまで培ってきた政治・経済などの社会システムの歯車がかみ合ってこない。戦後 80 年近くが経過した現在、多方面の分野でのかじ取りの変更が求められているのかもしれない。

協力隊事業は、1965 年に第一次隊 26 名が派遣されて以来、今年で 57 年目を向かえた。人生でいえば、あと 3 年で 60 才の還暦を迎える。発足当時は 20 才から 35 才までの青年が対象であったが、現在は 20 歳から 69 歳までに拡がり、呼称も青年海外協力隊から JICA 海外協力隊に変わった。この間、節目ふしめで事業の見直しの提言も数々あった。「青年海外協力隊 25 周年特集座談会」で出席者の 1 人である、当時内外政策研究会会長の大来佐武郎氏が<協力隊員の年齢が 39 才までひきあげられたなら、いっそ年齢制限を外して幅を広げるのも 1 つの方法ではないか>と提言されている(国際開発ジャーナル No.401 , 1990 年)。また、元 JICA 理事長であった緒方貞子氏が、駒ケ根市制 50 周年及び駒ケ根青年海外協力隊訓練所 25 周年記念講演「国際協力を日本の文化に」の中、協力隊の現場視察から次の二点に言及された<1. 活動の実際～現職参加の意義と高い専門性 2. 人材育成の役割を担う協力隊事業>(転機の海外援助、緒方貞子編、NHK 出版、2005 年)。JICA は、2019 年「新しい時代の協力隊事業のあり方」について考える有識者懇談会を設置し、現在「未来をつくる協力隊連絡会」として繋いでいる。

コロナ禍の中、2022 年 3 月末現在、39 か国に 337 名が派遣されている。マレーシアには一般 7 名、シニア 4 名の 11 名である(クロスロード 2022 年 5 月号)。本号では、還暦に近い協力隊事業を発足当時から現在まで関わってこられた高橋成雄氏に寄稿を頂き、当時の労苦の跡を探り、今後の協力隊の在り方の一筋としたいと考えた。

協力隊まつり 2022 開催される

今年は 4 月 23 日、24 日の二日間、東京会場（市ヶ谷地球ひろば）・関西会場（JICA 関西）・オンラインの三本立てで開催されました。マレーシア会も東京会場に出展いたしました。まだコロナの感染拡大が収まっていない中、果たしてどの程度の来場者があるかと心配されましたが、思ったよりも外部の参加者もあってよかったです。マレーシアブースにも応募相談に来て立ち寄ってくれた人、マレーシアに住んだことがある人、修学旅行で行ったことがある人、OB・OG の方々が立ち寄ってくださいました。

23 日には 2019 年度の隊員でコロナの感染拡大で一斉退避となった OG がブースを担当して、最新のマレーシアの活動状況などの説明にあたってくださいました。来場してくださった方、お手伝いいただいた方、ありがとうございました。

出展団体のブースのほか、メイン会場では、映画『クロスロード』の上映、『パラスポーツセミナー』、『キャリアパスセミナー＆トークセッション』、オンラインで世界とつながり一緒にダンスを踊るプログラムなどが行われました。

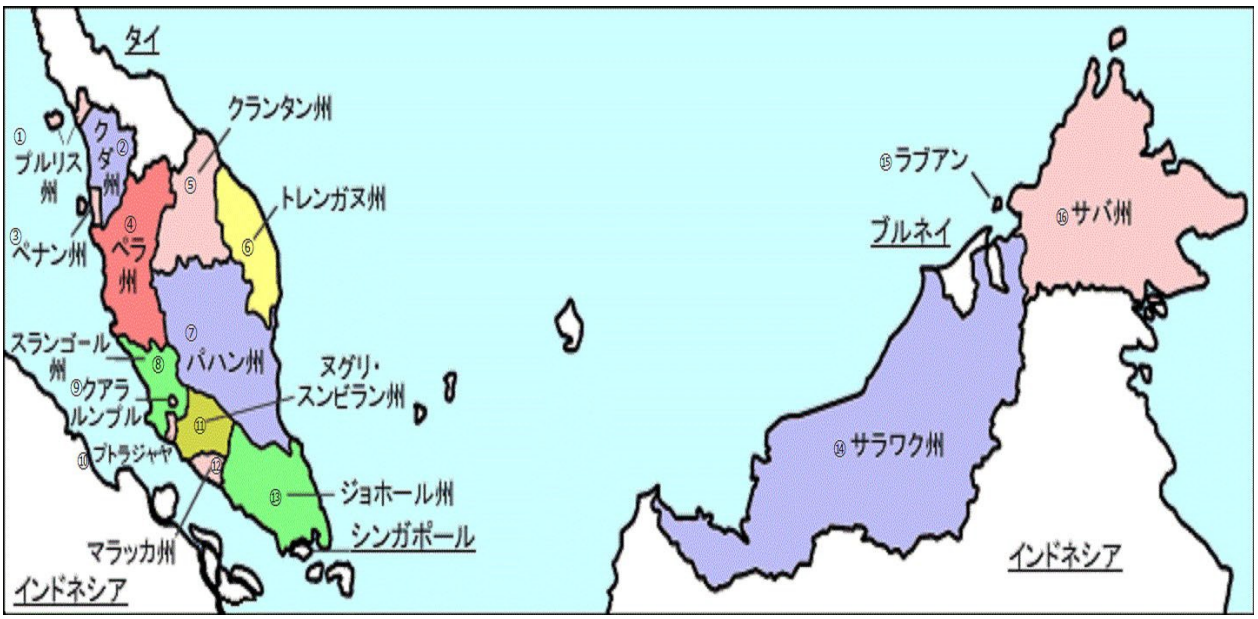
参加団体は東京会場 26、関西会場 23、オンライン 26 団体で延べ 75 団体（実数は 50 団体）でした。

マレーシアへの JICA 海外協力隊派遣状況

コロナの感染拡大で 2020 年 3 月一斉退避を余儀なくされていましたが、マレーシアへも 2021 年 12 月から隊員派遣が再開されました。2022 年 4 月現在で、11 名派遣されています。
配置図を JICA マレーシア事務所より提供いただきました。

マレーシア国　JICA 海外協力隊配置図

2022 年 4 月現在



		人数
①	プルリス州	0
②	クダ州	2
③	ペナン州	1
④	ペラ州	0
⑤	クランタン州	0

		人数
⑥	トレンガヌ州	1
⑦	パハン州	0
⑧	スランゴール州	1
⑨	クアラルンプール	1
⑩	プトラジャヤ（政府直轄州）	0

		人数
⑪	ヌグリ・スンビラン州	0
⑫	マラッカ州	4
⑬	ジョホール州	0

		人数
⑭	サラワク州	1
⑮	ラブアン（政府直轄州）	0
⑯	サバ州	0

派遣総数	11

職種は理科教育、青少年活動、環境教育、障がい児・者支援、コンピュータ技術、電気・電子機器、作業療法士、日本語教師、高齢者介護、自動車整備です。

東方政策 40 周年記念行事開催

マレーシアがルック・イースト（東方政策）を提唱して今年で 40 年です。K.L.では JICA 青年研修同窓団体等が主催となり、在マ日本大使館、JICA、日本政府観光局などが参加して「マレーシア・ジャパンフェスティバル」が 6 月 2 日～5 日まで開催されました。

「俳句」楽しんでいます

髙澤　榮子（昭和 59 年度 2 次隊　幼稚園教諭）

みなさまいかがお過ごしでしょうか。楽しみにしていた年一回のマレーシア会もコロナ禍で開催はなく、地方に住んでいる身としては、懐かしい皆さまとお出会いする機会がなくなって、さびしい思いがしています。

プノンペン工科大学にて　SV として赴任のご主人と

何か自分を変えたい、燃えるものが欲しい、と応募した協力隊。派遣（S 59 年 2 次隊）からはもう 40 年近くが経ちますが、振り返ってみますと、協力隊への参加が大きなターニングポイントだったなあ、と思うことがしばしばです。一つひとつは書けませんが、人生の節々に協力隊がいてくれたとでも言ったらよいでしょうか。協力隊がいろんなところ、いろんな場面へ私を連れて行ってくれた、人生を彩ってくれたように思っています。

そして、今の私は…。

いくつになっても続けられることをやろう、と 4 年ほど前に俳句デビュー。本棚にも俳句の本が増え続けています。全くの独学で勝手流ですが、NHK 全国俳句大会（2019 年 1 月）にはじめての投句が入選。これにすっかり気をよくし、それからはぽつんぽつんとですが、新聞や雑誌に投句して楽しむようになりました。

さくらんぼ摘む手の先のそらまさを　（2019 年 1 月 NHK 全国俳句大会 岸本尚毅選）

さくらんぼを摘んでいる時に、桜の若葉の間からまぶしいほどの空の青が目に飛び込んできて、その美しさに思わず浮かんできた…一句です。俳句は出来事を記録するにもぴったり。いい思い出となります。

投句をはじめて半年、朝日新聞の「朝日俳壇」に入選したとの知らせを受け取った時には、飛び上がらんばかりになりました。まさかのまさか、です。

自粛にも二人にもなれ梅雨に入る　（2020 年 7 月 朝日俳壇 長谷川櫂選）

はじめての入選だったので、『「二人にも」がワサビ』と選者の長谷川櫂さんの選もついていました。新聞に掲載されると、結構反響があって、遠くの友人や近所の方からも「載ってたね」、「見たよ」と声がかかりました。また、励みともなって、「よしっ」とやる気も出てきてー。もちろん没も多いのですが、継続は力なり。投句、続けています。

協力隊時代を思い起こしてみますと…。

電気も水道もままならない入植地での生活。日々の仕事や暮らしを俳句にして残せたらいいなあ、と思ったことがありました。その時はそのままに終わってしまっていたのですが、広がるサトウキビ畑の向こう、どこまでも続く地平線、唯一の移動手段だったバイクなど、生活の中に俳句の材料はいっぱい転がっていました。当時を思い出して…。

マンゴーやバイクで駆ける地平線
発電のモーター音消え星月夜

協力隊という引き出しから、これからは当時の暮らしも詠んでみようと思っています。

35 年ぶりに訪問した配属先　チュピンの入植地にて

第 6 回総会開催について

本来 2021 年に開催予定の第 6 回マレーシア会総会ですが、会報 18 号で開催延期のお知らせをしたままになっております。今年、1 年遅れでの開催を検討し、役員、ブロック担当に意見を聞いたところ、開催と再延期がほぼ同数となりました。今年できれば開催したいと思いましたが、親睦を旨とする当会にとり、総会後の懇親会は外せないものであり、懇親会を楽しみに出席される方も多いことを考慮し、大変残念ですが、再延期とすることにいたしました。開催のめどは 2023 年春か初夏のころと考えています。

また開催が決まりましたら、会報、ホームページ、メール等でお知らせいたします。どうぞ事情お汲み取りいただき、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

原稿　マレーシア会会報への原稿は随時受け付けています。OB・OG に向けて発信したいこと、活動紹介、職場紹介、日々の暮らしなどお寄せください。

訃報

田村宏さん（昭和 57.4）　2022 年 1 月ご逝去

突然のお知らせに深い悲しみに包まれています。大変残念です。心よりご冥福をお祈りいたします。

編集後記

今号は皆さんのたゆまぬ協力隊愛を感じる号となりました。協力隊が人生の大きな分岐点となったと思う方は多いと思います。創成期の熱い情熱、そして引き継がれている思いを実感しています。

コロナの感染拡大も落ち着かないうちに、ウクライナ侵攻が起こり、むなしさと無力感を感じることの多い日々ですが、明るい未来を信じたいと思います。

寄付のお礼・・ありがとうございました！

西島睦宣さん（49.2）大西益吉郎さん（49.2）より、合計 15,000 円の寄付をいただきました。活動費として、大切に使わせていただきます。なお、寄付は随時受け付けております。

よろしくお願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140　番号 51611341

（郵便局外から振り込みの場合：店番 018、普通口座　5161134　です）

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会
代表　白山　肇

事務局からお願い：住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。現在郵送で会報が届いている方で、パソコンのメールアドレスをお持ちの方もご連絡ください。メール会員として登録し、随時、共有情報をお届けします。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と 2010 年の青年海外協力隊 OB/OG 会出席者に E メールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在 630 余名となりました。まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行　青年海外協力隊マレーシア会
会長 白山　肇
162-8433
東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5
JICA 地球ひろば　メールボックス 51
TEL：　090-7186-1065（国際協力サロン）
MAIL：malaysia@ics-together.com
https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html
（　2022.6.30　発行　）